

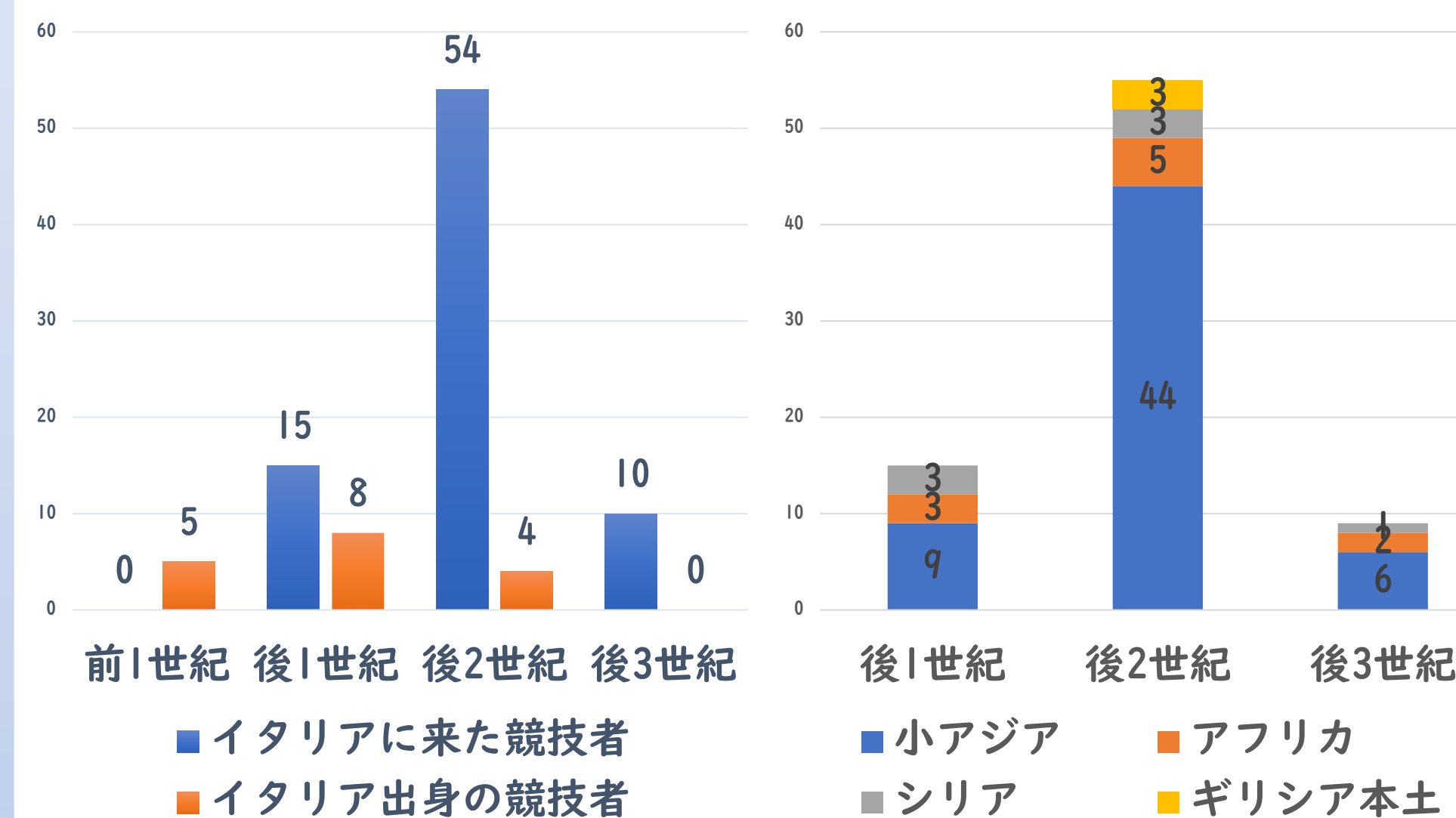
# 古代ローマ時代における 人とスポーツに関する研究

阿部 衛  
東京大学大学院総合文化研究科  
学術研究員

## はじめに

- 軽視されてきたローマ時代の競技祭
  - 古代ギリシア時代が最盛期であり、ギリシアがローマの軍門に下ったローマ時代は「衰退期」
- 両文化圏における競技と人の関係に対する固定観
  - ギリシア人…市民が競技祭に出場することを愛好
  - ローマ人…競技への出場は下層民の仕事  
市民は見世物として観戦する側
- ローマ時代にも競技祭は帝国各地で開催
  - ギリシア時代よりはるかに多くの競技祭が開催
  - その一方で、研究は進んでいないという現状

## 結果



## 考察

- 数値の変動と合致する社会状況
  - イタリアに競技祭が創設されたのは、後一世紀
    - ネアポリスでは、アウグストゥスの治世に創設
    - ローマでは、ドミティアヌス帝の治世に創設
  - 後二世紀に、イタリアを訪れる競技者が増加
    - 競技祭が時間を経るにしたがって、定着か？
  - 後三世紀に数字が大きく減少
    - 治安の悪化…この時期はいわゆる軍人皇帝時代
    - イタリアだけでなく他地域でも同様の傾向
- ◻ 帝政前期の大半の期間において、他地域の競技者がイタリアを訪れていたことは確か
- 小アジア出身者の活躍が目立つ現象
  - 帝国東方ギリシア語圏の競技祭と同様の傾向
  - ◻ 競技者たちが、イタリアの競技祭をギリシア世界各地の競技祭と区別することなく扱っていた可能性(T・Flavius Artemidorosの例)



後2世紀の碑文  
<https://www.metmuseum.org/art/collection/search/255013>

## 研究の目的および手法

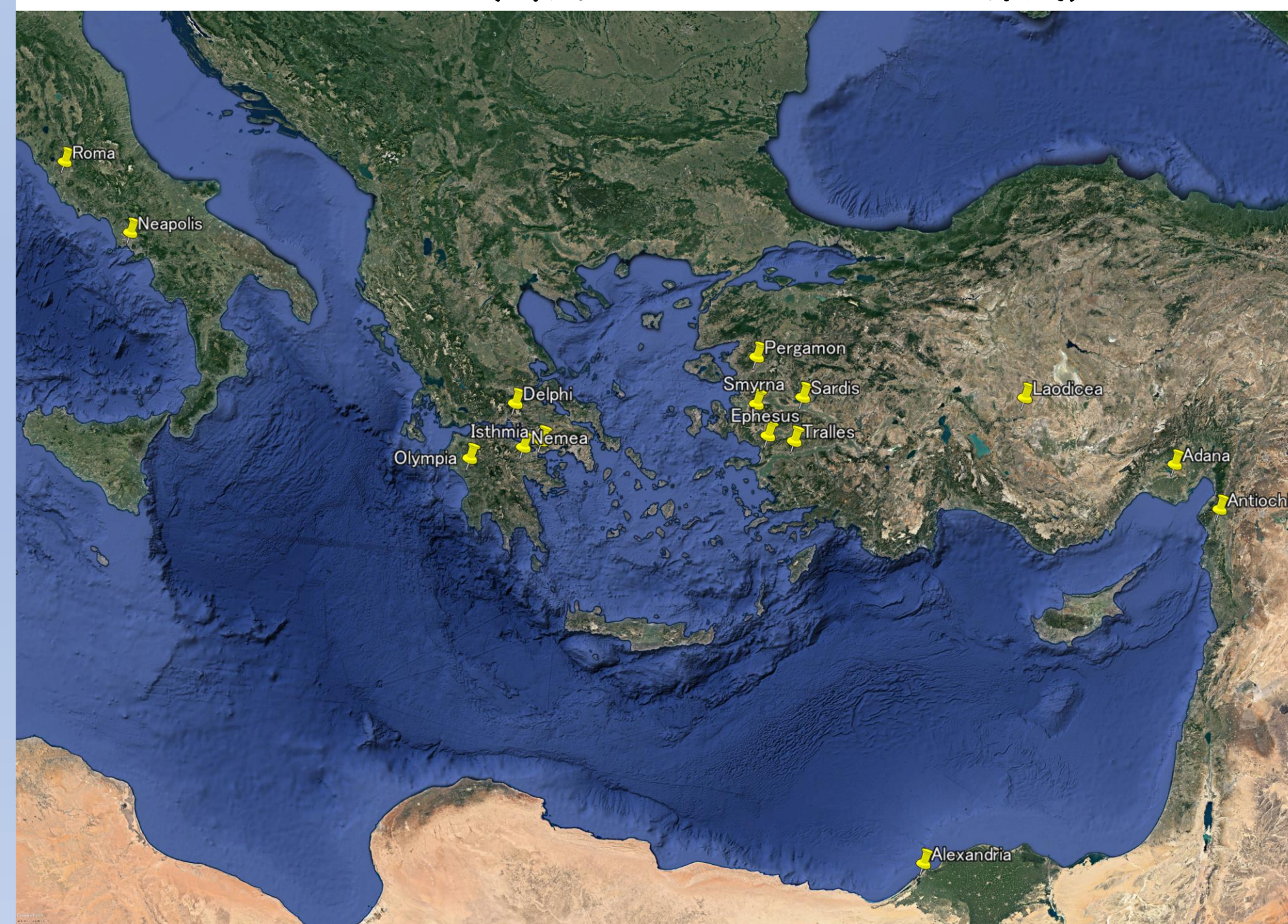
### 研究の目的

- 帝国東方ギリシア語圏と帝国西方ラテン語圏という枠組みを脱構築し、競技と人々の関係性を捉えなおすこと

### 研究の手法

- ローマ帝政前期において、両文化圏を横断して活躍する競技者の事例を収集

## T・Flavius Artemidorosの足跡 (碑文 IG XIV 746をもとに作成)



## おわりに

### 結論

- イタリアの地に根付くギリシア競技祭
  - ローマやネアポリスの競技祭がオリンピア祭などの伝統的な主要競技祭と並ぶ存在として認知
  - 選手は地中海世界各地から選手たちがイタリアに参集
- 帝政前期における競技祭はギリシア世界固有のものではなく、地中海世界を舞台にした催事

### 今後の課題

- 見えざる競技者をいかにとらえるか
  - 碑文は勝者により残されたもの
  - エペーポイやギュムナシオンなどの育成施設が鍵か